4　大津の農業を取り巻くいろいろ

FTA（自由貿易協定）など、今後さらに国際的な農産物貿易の自由化が進み、海外産の安い農産物の輸入が増え、それにともない国内産の農産物の価格が安くなることが予想されています。

また、少子高齢化による人口減少社会の到来によって、国内の食料需要が全体として小さくなることも予想されています。さらに安全かつ安心な食べものを求める声も多いなど、近年ではライフスタイルの多様化により、消費者が食べものに求めるニーズも多様化しています。

農産物の価格が安くなることは、消費者にとってはプラスですが、国内の産地間の競争もいっそう激しくなることが予想されます。生産者にとっては、さらなるコストダウンが求められるほか、農商工連携や6次産業化などによる農産物の差別化や新しい市場の開拓など、新しい取り組みが必要です。

農業は食料を生産するだけではなく、美しい田園風景などのすばらしい自然景観を私たちにもたらし、暮らしをより豊かにしてくれます。私たちがよりこころ豊かに暮らすためには、農業の存在を今一度見直し、生産者を周囲が支える仕組みづくりが必要です。

コラム 一昔前の大津の農村風景

大津市苗鹿で見られる
牛での代掻き作業(1958年)

写真提供:前野隆資(滋賀県立琵琶湖博物館所蔵)

写真は約60年前の大津市で見られた農業の風景です。今では当たり前になったトラクターなどの農業機械にかわって、牛が大いに活躍していました。当時は牛を用いた農業が盛んで、特に仰木地区では「一戸に牛一頭」といわれるほど、どこの家でも牛を飼っていました。家の中に牛小屋があって、人と牛が家族のように暮らしていたのです。

この牛たちが活躍するのは、田畑の上だけではありません。牛たちの糞尿は肥(こやし)として、栄養豊富な肥料として田畑にまかれていました。当時、肥料となる牛の糞尿は農家にとって重要なものでした。市街地から肥を詰めたたくさんの桶が琵琶湖の上を船で運ばれ、近郊農村の農家がその桶の肥を田畑にまく。そんな風景がすこしばかり昔の大津では当たり前だったのです。